

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

●理事長メッセージ	1
●フランクフルトBF初参加の記	2
●念願のフランクフルト	3
●フランクフルトBF雑感	4
●2012年度 関西懇親パーティー／委員会報告	5
●KeikoのNY通信	6

理事長メッセージ

秋も深まり紅葉が一段と美しい季節になりました。秋と言えば外国雑誌取扱い業者にとって契約更新の時期であり多忙を極めていることと思います。

当業界におきましては、主要学術雑誌が紙媒体から電子媒体に変わったことで業務内容が一変しております。従来は出版者が購読者の利用実態を把握した上で一物一価の価格設定をしておりましたが、現在の電子商品は購読者毎の利用環境によって個別に価格が設定されるため、事務量の増大と複雑化が進んでいます。更には、官公庁、国立大学を中心に行われる入札による低価格競争の日常化により利益率の低下を強いられるという、二重苦の様相を呈しております。この雑誌シーズンが一段落しますと、年度末、年度初めを迎え洋書関連業界が繁忙な時期を迎えることとなります。

過日、昨年に引き続きフランクフルトブックフェアに参加してまいりました。そこでの感想を簡単に述べさせていただきます。ギリシャに端を発したヨーロッパの経済危機はイタリア、スペインなどの国々にも飛び火し、出版界にも大きな影響を与えています。他の国々でも図書館の支払いが停滞している模様です。会場を見渡しても書籍の電子化は既成

の事実であり、昨今報じられた米ランダムハウスと英ペンギンハウスの超大型合併は、当業界の変化を更に加速させるように見えてなりません。また、欧米の主要な医学系出版者は、経済不況による広告収入の激減とダウンロード制限による減収、更にはオープンアクセスが一般化する中での売上減に晒され、新たなビジネスモデルを模索する必要に迫られていることを感じました。

さて、日本洋書協会は来年2月に理事の改選が行われます。先の定期総会において規約の改正が行われ、役員選挙が総会の3ヶ月前に行われることになりました。これにより新任理事が次期の活動方針案、予算案を策定することになります。この新体制のもと、会員各位がこの変化する時代に生き残り、発展を遂げられるような協会活動を牽引されますことを心より願っております。

2012年10月31日

日本洋書協会

理事長 山川 隆 司

移転のお知らせ

株式会社 極東書店

新住所 〒101-8672 東京都千代田区三崎町2-7-10 帝都三崎町ビル
※電話は変更ございません。

株式会社 東京ブックランド

新住所 〒160-0008 東京都新宿区三栄町29
TEL: 03-6457-7014 FAX: 03-6457-7038

フランクフルトブックフェア 初参加の記

初めてフランクフルトブックフェアに参加しました。日頃取引をし、お世話になっている出版社、取次に謝意を伝え、関係を強化するためと、新しい出版社、商品を開発することが大きな目的でしたが、胸の内に一つの思いがありました。

今は和やかで観光客も多いフランクフルト中央のレーマー広場で、ナチスの時代 1933 年 5 月 10 日、2 万 5 千冊を超える書籍が燃やされる「焚書事件」が起こったことをご存知の方もいらっしゃるかと思います。この事件を目撃した思想家、神学者パウル・ティリッヒは、強い衝撃を受け、アメリカへの亡命を決意します。非常な苦労を重ねた後、アメリカでも成功を取めた彼に、ドイツの書籍販売協会平和賞が与えられたのがちょうど 50 年前 1962 年のフランクフルトブックフェアでした¹。今日私たちが平和のうちに、あたりまえのように、書籍に関する仕事をさせていただいたフランクフルトでも、かつて悲惨な出来事があったこと、そしてこのようなことは二度とあってはいけないうことと心に刻み、ティリッヒの受賞 50 周年を、何人かとても共有できたらとの思いでした。

10 月 10 日（木）のブックフェア初日、奇しくも最初にアポイントメントをとっていたのが、ティリッヒの『主要著作集』などを刊行するデ・グロイター社でした。ところが、ブースに行ってみると何と予約していた東アジア担当の営業責任者が数週間まえに突然辞めたというではありませんか！代わりに、応接してくれた若い管理職とは、普通に営業の話をしただけに終わり、ああ、ここに一年前まで 38 年間同社で勤め上げた M. アネッケ氏、ビスマルク時代に関する論文で修士号を得た前任の担当役員 P. オズボーン氏がいたら、もっと話がはずんだらうにと、少し残念な気がいたしましたが、気を取り直し、アポをいれていたホール 4.2 の他の学術出版社を回りました。今回の出張を準備するにあたり、予め『日本洋書協会会報』のバックナンバーを読んで、先達の皆様は 30 分きざみでお仕事をこなされている様子を読ませていただきましたが、小生は初めての事ゆえ、余裕をもって一時間おきのアポとし、空いた時間は歩き

回って、情報の収集に努めました。

二日目はホール 3.1 に行き、宗教関連の出版社のブースから歩き始めました。直接取引ではない出版社も少なからずあったため、弊社のフロアマップ、カタログ、英文の社史を持参して自己紹介から始める場合もありました。出発前に成田空港で見つけた絵葉書「銀座の夜景」に弊社が写っており、それを配って、東京に来る機会がありましたら、こんなナイトライフがありますよと言うと、堅物（に見える）キリスト系出版社の編集者の顔がゆるむのも愉快でした。

遅い昼食は会場広場アゴラでプレッツェルとジャガイモスープをすすりながら、今年のゲスト国ニュージーランド原住民のダイナミックなダンスをひととき楽しみました。

国際色豊かなホール 8 に移ると、思いがけない再会が待っていました。出展されていることも知らなかったのですが、旧知の英国ラタワース社のブースに行き当たりました。同社プリンク氏の父上は古典学者で、東京大学にその蔵書を寄贈されたこともあり、その折弊社に立ち寄って下さった方でした。英国の出版事情、大学の様子などを伺い、ところで、一体どうして今年フランクフルトに来る気になったかと尋ねられ、動機の一つに、ティリッヒ受賞 50 年のことがあることを告げると、わが意を得たりとばかりに共感していただき、今年も平和賞の受賞の式典が日曜日にあり、ティリッヒの関連行事もあるかもしれないから、係に聞いてみたらいいと教えて下さいました。

ホール 8 では、主に北米の出版社を回りましたが、これまで知らなかったイスラエルの出版社などでも話を聴くことが出来、世界は広いなあとの思いを深めました。その晩はオランダのブリル社からご招待をいただき、会場近くのホテルで、DH 国際書房の野上氏、オーストラリアからのゲストお二方と一緒に正式なディナーに与りました。楽しい歓談の時を過ごさせていただき、時差ボケと緊張からか、睡眠不足となっていた身体と心に栄養をいただいて、明日もう一日頑張ろうと、タクシーでホテルに帰りました。

¹ この事件については深井智朗『思想としての編集者』（新教出版社、2011 年）pp.184-189. に学びました。

三日目は弊社の出版部で翻訳を出している米国、ドイツの数社とアポが残っていました。出版の計画を伺い、取次業者の変更によって、継続書籍の配送に問題が生じていないかなどを確認いたしました。その後またホール 3.1 の宗教出版社ブースに戻り、これまで知らなかった小さな出版社の発掘及び、5 年後に宗教改革 500 年を迎えるドイツの教会についての情報の収集に努めました。ある出版社から日本には神学生が何人位いるのかと質問されましたが、恥ずかしいことに答えられませんでした。

最後に訪れたのはドイツ書籍販売協会でした。日曜日の平和賞の式典はあいにく満席とのことでしたが、50 年前のティリッヒの受賞に関する情報をくれるようにと、名刺を渡してきました。ちなみに今年の平和賞の受賞者は中国の詩人、音楽家、小説家、ドキュメント作家リャオ・イウ 氏です。現体制の下で、弱く、小さくされてしまった人々の側に立ち、体制を非難する詩を書いたということで、1990 年から 1994 年までを牢

獄で過ごしています。海外での表現活動を禁じられ、2010 年にはケルンで開かれた文学祭に出席しようと予約していた飛行機から引きずり出されて、出国することが出来ず、2011 年の 7 月になって「著作し、表現する自由」を求めて、ベトナムを経由してドイツに亡命してきた人物とのことです。かつてはフランクフルト学派の知識人を追放し、亡命に追い込んだこともあるドイツが、今日では逆の立場になっていることに大きな歴史の流れを感じざるをえません。また日本と中国との関係では、国と国、人と人とを敵対させ、憎みあうようにエスカレートさせてしまうような報道、言論が多いと感じられてしまう昨今、かの国にも苦しみられ弾圧されながら、必死で生きている人々がいること、その人たちに思いを寄せることで、別の視点があるのではないかとリャオ・イウ の受賞に思わされました。

(株式会社教文館 上島 和彦)

念願のフランクフルト

この業界で働かせて頂いている以上、一度は訪れてみたいとずっと思っていた場所でした。

今回おのほりさん状態で挑んだ「初ブックフェア」には自分にいくつか課題を課しました。アポの時間と場所を書いた 3 日分のスケジュールを片手に、足元は私の戦闘服の象徴でもあるハイヒールを脱ぎ、海外の出版社の方々にも負けぬ様にといい気持ちから、ぴかぴかに磨いた革のローファーに履き替えました。

うちの様な小さな会社は名前が知られている訳でもなければ、ましてや最先端という言葉と対照的な立場にあります。しかし、だからこそその役割が私達にもまだあると思っています。その為、時代に伴うこの業界や消費側の変化に順応しながら、自分たちの立場を突詰めていかなければいけません。

それを踏まえ挑んだ 3 日間は新鮮なものでした。(それにしても海外出版社のブースはどこもお洒落で、床の色 1 つをとってもなんて素敵なの! と感激しました。)

印象に残った事といえば、昼間ビール片手に商談を

していたある出版社の方が、夕方になると "Now, I can drink!" と言ってまた飲み始めていました。「さっきまで飲んでいなかった!」と突っ込まずにはいられていませんでしたが、きっとお国柄でもあるのでしょう。

今回たくさんの方々を国をまたいで直接話しができた事はとても良い経験でした。その文化の背景を知り、それに伴う交渉力、理解力、展開力を身につける事の大切さも学ばせてもらい、いかに自分の仕事のやり方が小さいものかも痛感する事ができました。フランクリンの“説得をしたいなら、論理を用いるのではなく、利益について話せ。”という言葉がありますが、会社にとって利益は最も重要ですが、この仕事の質やレベルアップを目指すのであれば「相手を知る」という事もまた仕事面においては重要な事だと改めて感じました。

来年も今年とは違う課題を課し、またこの街へ戻ってこようと思ったのでした。

(有限会社藤井洋書 関谷 有香)

フランクフルト BF 雑感

世界最大の本のイベント「フランクフルト・ブックフェア」が今年も10月10日（水）～14日（日）の5日間にかけて開催されました。今年は天候にも恵まれ、朝晩は冷えるものの空気は澄んでおり、紅葉も美しいヨーロッパの秋を存分に感じさせる気候でした。

本年の出展企業数は100 カ国から約 7,300 社、来場者は約 282,000 名と、昨年より多少の落ち込みを見たとありますが、会場内は例年通りの賑わいを見せていました。

私は昨年に引き続き2回目の参加となりました。初参加であった昨年は見るものすべてが目新しく、またその壮大なスケールとパワーに圧倒され、ただただ驚き、興奮するばかりの5日間でした。今年はやや落ち着いたものの、やはり世界中から『本』に力を注ぐ人たちが一堂に会するその熱気に強いインパクトを受けました。

本ブックフェアは、会期5日間で、最初の3日間がビジネスデイ、土日と重なる後半2日間が一般公開日となっています。今年はビジネスデイの3日間収まることなく、4日目に至るまで朝から夕方にかけて隙間なく詰まったスケジュールで、数多くの出版社と面会する機会を得ました。各出版社との面談時間は約30分～1時間と決して長いものではありません。ですが、日頃メールを介してコミュニケーションを取っている相手と顔を合せ、握手を交わし、直に話し合うことによって、距離を縮めることができ時間以上の充実感を得ることができます。出版社の大きさは小さきまぎまぎですが、それぞれの担当者が力強く自社の商品のアピールポイントを説明し、いかにして日本の顧客に自分たちの本を届けるかを真剣に語る姿を見るにつけ、私自身もどうやったらその期待に応えられるだろうか、と改めて考え、心を新たにできる機会となりました。本ブックフェアは、短時間ながらビジネスパートナー同士が「次の一年も共に頑張ろう」とお互いの意思確認をできる非常に重要な場所となっているように思いました。

電子書籍の隆盛は毎年の報告に書かれている通りで、改めて言及するまでもないことですが、多くの出版社が、Kindle、iPadをはじめとする電子書籍リーダー向けコンテンツを、ごく当たり前にラインナップに加えています。電子書籍に関する講演会もそこそこで開かれ、学術書から一般書、子ども向け商品に至るまで電子化・オ

ンライン化は広がっています。また、今回のフェアにおいては、通り道の至る所でkoboの広告が展示されていたのも印象的でした。

その一方、出版社とのミーティングの中で、出版業界全体が、電子化・オンライン化に向かいながらも、ユーザーはまだ印刷体の『本』や印刷物による情報を必要としている、ということでは一致し、印刷体・電子体どちらのニーズも満たすような戦略をお互いに進めていくと意見を交わすことができました。

また、これも今更の話ではありますが、中国系出版社の発展が目覚ましいと改めて感じました。日本や中国・韓国などアジアを中心とした展示ブースが集まるHall 6.0はもちろんのこと、科学分野・医療系出版社が集まるHall 4.2においても、中国系出版社のブースの数・規模共に拡大していることを強く感じます。つい先日、Kindleが中国に進出するとのニュースもあり、電子書籍の分野においても今後ますます発展していくことが予想されますが、日本の書籍業界もダイナミックに変革していくことが求められているように思います。

最後に、無事5日間の会期を終えた後、フライトまでの数時間を使い、フランクフルトからほど近い都市マインツにある印刷博物館へ行ってきました。活版印刷を発明したグーテンベルク生誕の地に建てられたこの博物館の中には歴代の印刷機や世界各国の印刷技術の歴史が展示されるとともに、世界最古の活版印刷である『グーテンベルク聖書』が展示されています。約550年前にグーテンベルクによって発明された印刷という手法が書籍業界の中の主流派として長きにわたり受け継がれてきましたが、その姿もここ数年でまた新しい形を生み出そうとしています。今後、どの形が主流となるのか、今はまだ結果は見えませんが、形が変わろうともいつの時代も『本』に込められる思いや、それを求める人々の心は同じく強いものだと感じました。

印刷の始まりから最先端にまで触れることができた本年のフランクフルト・ブックフェアは非常に学ぶところの多い5日間となりました。帰国後、日々あわただしく過ぎていく毎日ですが、時にブックフェアで感じたことを思い出し、来年また出版社の方々と笑顔で会えるようこの一年を実りあるものとさせていきたいと思っています。

（丸善株式会社 五十嵐杏奈）

2012年度 関西懇親パーティー

2012年9月13日(木)大阪第一ホテルにて関西懇親パーティーを開催いたしました。

2年ぶりの開催ということで関西、関東地区から17社37名と大勢の方にご参加いただきました。来賓として先に行われたSIGセミナーの講師をお努めいただいた朝倉敏夫氏(国立民族学博物館教授)にもご参加いただき、先ず

山川理事長の開会の挨拶、続いて㈱藤井洋書の藤井社長のご発声で乾杯、懇談・情報交換入りました。

皆様、久しぶりの再会の方も多く最後まで食事を楽しみながら会話が弾んでいたようです。中締めは丸善(株)の土方常務にお願いしました。来年もまた皆様とお会いできることを楽しみにしております。(R.T記)

委員会報告<レクリエーション委員会>

第17回 JAIP ボウリング大会

2012年8月28日(火)

会場：ロサボウル(池袋)

参加者：18名(6社) 男性16名 女性2名

競技：3Gのトータルピン(ハンディキャップあり：平均150として算出)

順位	氏名	会社	総得点	1G	2G	3G	AVG	HDCP/G
1	小向奈保子	絵本の家	491	144	116	153	137.7	26
2	平野 覚	ユサコ	487	159	192	172	174.3	-12
3	ダーレンハリデー	マクミランランゲージハウス	484	183	168	139	163.3	-2
4	佐藤 隆	日本出版貿易	454	99	151	132	127.3	24
5	山中玄致	ユサコ	448	146	123	188	152.3	-3
6	平川幹紘	マクミランランゲージハウス	445	105	114	118	112.3	36
7	鶴 竜次	東亜ブック	438	101	158	146	135.0	11
8	天野秀晃	日本出版貿易	428	103	109	144	118.7	24
9	和田 聡	ネリーズ	417	121	126	98	115.0	24
10	柿沼大輔	ユサコ	416	113	128	112	117.7	21

ハイスコア男性/G 平野 覚(ユサコ) 192

ハイスコア女性/G 小向 奈保子(絵本の家) 153

優勝者のコメント

振り返ってみると年4回のボーリング大会ですが、気付くと毎回、休まず参加しており、他社の皆さまと交流できるいい機会ということもあり、いつも楽しい時間を過ごしております。今回はハンディキャップのおかげもあり、初めて優勝することができました。これには自分でも驚いてますが、大変嬉しく思っております。次回もよろしく願っています。

次回は2013年3月に開催予定です。

第139回 72会ゴルフコンペ

2012年9月8日(土) 晴れ

会場：さいたまゴルフクラブ(埼玉県)

INコース→OUTコース

参加者：11名(8社)

競技：18ホール ストロークプレー 新ペリアによる

<成績表>		グロス	ハンデ	ネット
優勝	大塚賢一郎(テクノミック)	86	15.6	70.4
2位	鶴 竜次(東亜ブック)	86	13.2	72.8
3位	大川博通(ディー・エイチ・インターナショナル)	105	30.0	75.0
4位	西山幸児(西山洋書)	84	8.4	75.6
5位	柳 忠士(ワタナベ流通)	94	18.0	76.0
6位	西山久吉(西山洋書)	95	16.8	78.2
7位	久住多賀子(ゲーテ書房)	118	38.4	79.6
8位	唐澤廣憲(ゲーテ書房)	108	27.6	80.4
9位	山下志信(サンメディア)	109	27.6	81.4
10位	富田斉秀(ケイラインロジスティクス)	101	19.2	81.8
11位	野上 衛(ディー・エイチ・インターナショナル)	109	22.8	86.2

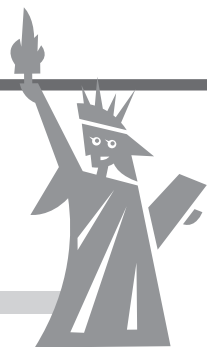
ベスグロ 西山幸児(西山洋書) 84 (IN 39 OUT 45)

ドラコン 大塚賢一郎(テクノミック) 西山久吉(西山洋書) 西山幸児(西山洋書) × 2

ニアピン 大塚 賢一郎(テクノミック) 西山久吉(西山洋書)



次回は2013年4月 龍ヶ崎CC(茨城県)で開催予定です。



10月も後半に入り、ニューヨークの街はすっかり秋色に染まってきました。ハローウィンを控え、住処のブルックリンでもたくさんの大きなカボチャが玄関先に飾られています。来月6日は大統領選挙の投票日。誰もが注目するテレビ討論会も終わり、あとは結果を待つのみです。その先はサンクスギビングにクリスマスと、いよいよイベント続きのシーズンの到来です。

夏のニューヨークは長い日照時間を存分に享受できるよう野外コンサートやイベントが目白押しでしたが、秋はやはり読書の秋、そして芸術の秋。9月の末にBrooklyn Book FestivalとDumbo Art Festivalに足を運ぶ機会がありました。

Brooklyn Book FestivalはBorough Hall 駅（マンハッタンからEast Riverを渡って2つ目の駅）の真上の広場で開催されます。BEAにはメジャーな出版社がたくさん出展するのに対し、Brooklyn Book Festivalでは多くの地元の独立系出版社及び書店が出展します。ブルックリンの歴史本やブルックリンを舞台とした小説、ブルックリン在住の著者の本など、展示販売されている書籍はそれぞれに拘りを感じる本ばかり。あるブースでは”What are you reading?”と題したパネルが置いてあり、通りすがりの人たちが読んでいる書籍のタイトルを書いたPost-Itでパネルが埋め尽くされていました。青空の下で出展者のブースを気ままに廻りながら、本に触れることの楽しさを改めて感じたイベントでした。

Dumbo Art Festivalはブックフェスティバルの1週間後にブルックリンブリッジの袂で開催されるモダンアートのフィスティブアルです。Dumboはもともと倉庫街だったところですがこの10数年ですっかり姿を変え、今は多数のアーティストがスタジオを持つ場所としても知られています。フェスティバル開催中はエリア内の様々なところでアートが展示されているので、参加者は地図を片手にぶらぶら散策しながらアートを鑑賞することができます。最も面

白かったのはこの時だけ公開されるアーティストのアートスタジオを見て廻ったこと。普段、知らずに通り過ぎていた古びたビルの中に多数のスタジオが個室の形で設けてあり、アーティストが各々の世界観を作り出していました。必ずしも簡単に理解できる空間ではありませんでしたが、アーティストという職業の本質を垣間見ることができ、とても興味深い体験でした。

ブルックリンはマンハッタンとは異なる独特の雰囲気があり、「自己表現の自由」を感じる場所です。ニューヨークでの生活全体を通して感じることもありますが、ここには自分を自由に表現する場があります。年齢、性別、国籍などに関係なく、問われるのは自分という一人の人間がどうあるか、ありたいかということだけです。職場でも同じです。言い換えればそれだけ自分に責任を持つということですが、それがとても心地良く感じます。こちらに来てから様々な形で自分を表現している人たちにたくさん出会ってきました。自分が自分自身で居られるところ。それがニューヨークの魅力だと感じています。

2012年10月末@ニューヨーク

平野圭子



Brooklyn Book Festival

好評発売中

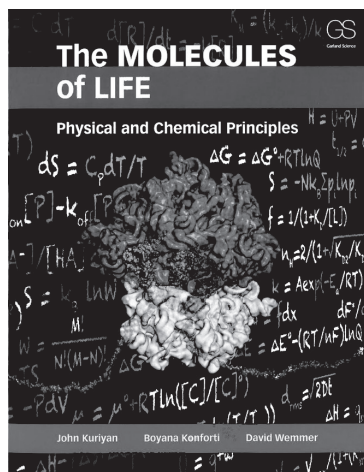
生命の分子：物理・化学的原理

The Molecules of Life

Physical and Chemical Principles

John Kuriyan, University of California, Berkeley, USA
Boyana Konforti, Cell Press, USA
David Wemmer, University of California, Berkeley, USA

2012 Paperback 1,032 pages 900 illustrations
ISBN: 978-0-8153-4188-8 £50.00



The field of biochemistry is entering an exciting era in which genomic information is being integrated into molecular-level descriptions of the physical processes that make life possible. *The Molecules of Life* is a new textbook that provides an integrated physical and biochemical foundation for undergraduate students majoring in biology or health sciences. This new generation of molecular biologists and biochemists will harness the tools and insights of physics and chemistry to exploit the emergence of genomics and systems-level information in biology, and will shape the future of medicine.

The book integrates fundamental concepts in thermodynamics and kinetics with an introduction to biological mechanism at the level of molecular structure. The central theme is that the ways in which proteins, DNA, and RNA work together in a cell are connected intimately to the structures of these biological macromolecules. The structures, in turn, depend on interactions between the atoms in these molecules, and on the interplay between energy and entropy, which results in the remarkable ability of biological systems to self-assemble and control their own replication.

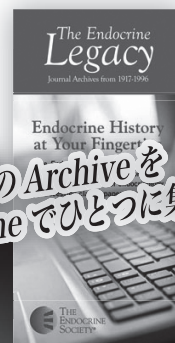
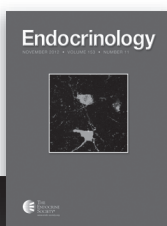
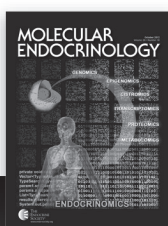
The Molecules of Life deepens our understanding of how life functions by illuminating the physical principles underpinning many complex biological phenomena, including how nerves transmit signals, the actions of chaperones in protein folding, and how polymerases and ribosomes achieve high fidelity.

Contents:

Part I. Biological Molecules 1. From Genes to RNA to Proteins 2. Nucleic Acid Structure 3. Glycans and Lipids 4. Protein Structure 5. Evolutionary Variation in Proteins **Part II. Energy and Entropy** 6. Energy and Intermolecular Forces 7. Entropy 8. Linking Energy and Entropy **Part III. Free Energy** 9. Free Energy 10. Chemical Potential and the Drive to Equilibrium 11. Voltages and Free Energy **Part IV. Molecular Interactions** 12. Molecular Recognition 13. Specificity of Macromolecular Recognition 14. Allostery **Part V. Kinetics and Catalysis** 15. Rates of Molecular Processes 16. Principles of Enzyme Catalysis 17. Diffusion and Transport **Part VI. Assembly and Activity** 18. Folding 19. Fidelity in DNA and Protein Synthesis

The Endocrine Legacy

Journal Archives from 1917-1996



4誌の Archive を
online でひとつに集約

The Endocrine Legacy Journal Archives: 1917-1996は、
米国内分泌学会: Endocrine Society が刊行する4タイトルの
オンライン・アーカイブで、1917年~1996年に刊行された号
(Vol.1 No.1 ~) を収録しています。

約 **80** 年間分、合計 347,000 ページ以上の閲覧が可能です。
なお、1997 年から最新号の 1 年前まではフリーアクセスで
ご利用いただけます

収録タイトル



Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism (JCEM)

世界トップレベルの内分泌臨床研究と最先端の Clinical Practice Review に関する査読誌です。



Molecular Endocrinology

受容体とホルモンがどのように遺伝子発現、発達、生理機能に影響するのかに焦点を当てた雑誌です。



Endocrinology

内分泌腺やホルモンに関する質の高い基礎研究を幅広く取り扱います。



Endocrine Reviews

内分泌学の重要な研究動向を把握し、研究の水準を高く保つために必須の学術誌です。

2013年3月31日までのオーダーで
初年度のメンテナンスフィーが無料!

60日間無料トライアル実施中!

【日本総代理店】

ユサコ株式会社

<http://www.usaco.co.jp/>

●東日本営業所

〒106-0044 東京都港区東麻布2-17-12

Tel. 03-3505-3256 Fax. 03-3505-6282 E-mail. tokyo-sales@usaco.co.jp

●西日本営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原2-14-10 中尾ロイヤルビル

Tel. 06-6393-0303 Fax. 06-6393-0617 E-mail. osaka-sales@usaco.co.jp